

発行元
東京新聞
南千住専売店
Tel 3803-1781
発行責任者
鬼塚 佳代子
Tel 090-2657-0300

すまいるたん



第441号
令和2年

5月10日

三河島列車事故とは

三河島列車事故とは昭和三十七年五月三日二十一時三十七分頃に国鉄（現JR）常磐線三河島駅付近で起きた列車脱線多重衝突事故です。荒川消防署から救助隊が出場しました。

消防車両 約八十台、消防職員約千名

この事故を機に、自動列車停止装置（ATS）が、計画を前倒しにする形で国鉄全線に設置されることになり、1966年（昭和四十一年）までに一応の整備を完了しました。

三河島列車事故が起きた際、多くの犠牲者の方たちが、三河島駅近くにある浄正寺に運ばれて供養されました。

近隣に住む方たちが協力し、怪我をした人や亡くなられた人を家の網戸を外し担架代わりにして使い運ぶなどの助けもありました。事故現場に生えていたツツジは今ではお寺の敷地内に植えられています。

（荒川消防署HPより抜粋）

以下は事故翌日の東京新聞の朝刊の記事より抜粋致しました。

死者163 重軽傷385人に

責任者を徹底追及

貨車が信号無視

警視庁の捜査本部と国鉄現地対策文部の調べによると、三河島衝突事件発生時の状況は次のようだ。

最初の事故をひき起こした貨物列車は、いつも三河島駅の待機線で下り電車が通過してから発車することになっていた。ところが、この日に限って、下り電車が

日暮里駅を定刻より三分遅れて発車した。貨物列車は電車が通過したと思つたのか、赤信号を無視して走り出したが、このとき下り線に入るポイントが切り替えてなかつたので、列車はそのまま突っ走り、車両止めの砂利山にぶつかり、蒸気機関車と前部三両が脱線、下り線に傾いて乗りあげた。そこへ走ってきた上野発取手行き電車が蒸気機関車にぶつかり、電車の前部一両が大破して上り線路上に傾いた、

事故の直後、電車の乗客は車内の緊急コックを使ってドアをあけ、上り線路上に約五十人が降りて歩き出した。

そのとき上り電車が時速約八十キロで進行してきて、線路を歩いていた人の群れにアツという間に突っ込んだ。上り

電車は下り電車の最前部に衝突、下り最前部車両を約四十メートル引きずってやまと止まった。上り電車前部四両は脱線、最前部一両は車体の上半分がふっ飛び、

高架線から約五メートル下の荒川区荒川三

●会社の屋根に覆いかぶさるようにして落ちた。この事故で架線をつつてある鉄塔もへし折られた。

このように多数の死傷者を出した原因について上り電車の前から三両が約七メートルの高架線から転落したこと、それにさきの国電田町事故と同じように脱線した下り電車の乗客が上り線の線路上を歩いて上り電車にはねられるという二つの悪条件が重なつたため。下り電車が脱線してから上り電車が現場に到着するまでの約四分間あつたので、下り電車の乗務員が発煙筒をたくなどして、危険を上り電車に知らせる余裕があつたはずで、これを知らせれば、これほどの大事故にならなかつただろうと国鉄はいっている。



白日にさらされた惨状

左端が脱線した貨物列車、中央が下り電車、右が脱線して民家に突っ込んだ上り電車（三河島で）

